

調査

確かな品質が認められてきた福島県の清酒 ～全国新酒鑑評会で6年連続の金賞受賞数日本一～

<要 旨>

1. 金賞受賞数日本一の福島県

全国新酒鑑評会において、福島県は2012年度から6年連続で金賞受賞数が日本一である。1989年度には金賞受賞数がゼロであった本県清酒の品質が向上したのは、県独自の酵母や酒造好適米の開発、清酒アカデミーや「金取り会」での蔵元同士の技術向上など、蔵元、酒造組合、県などが一体となって品質向上に取り組んできた成果である。

2. 福島県の清酒課税移出数量の推移

2017年の福島県の清酒課税移出数量は全国第8位と上位にある。年々減少基調で推移しているが、特定名称酒に限れば、2011年以降増加基調を辿っており、2016年には一般酒の数量を逆転した。

3. 輸出状況

海外での日本食ブームもあって、全国の清酒輸出数量は近年大きく増加してきている。2016年度の福島県の清酒輸出量は全国第19位である。韓国や中国をはじめ本県などからの輸入規制がまだ残っている国もあり、これらの国での規制が解除されることが待たれる。

4. 福島県産清酒 PR に向けた取り組み

福島県産清酒のPR活動に蔵元や関係機関などが積極的に取り組んでいる。清酒は観光と結びついたコンテンツともなっており、風評被害の払拭も含め、「ふくしまの酒」に期待される役割は大きい。

はじめに

福島県の清酒製造業は、会津地方を中心に地場産業として根付いており、気候や風土の異なる中通り・会津・浜通りの各地にさまざまな特色をもった蔵元がある。従来、福島県の清酒は新潟県などの酒どころに比べ知名度が低く、多くの生産量を誇っているものの、「酒どころ」というイメージは薄いというのが実状であった。しかし、近年は酒の品質向上に蔵元・県・業界団体が一体となって取り組んでおり、その結果が6年連続での全国新酒鑑評会日本一の実績に結び付いた。

本稿では福島県の清酒について、課税移出量や販売量などの現状をまとめるとともに、これまで

の品質向上に向けた取り組みなどを紹介する。

1. 金賞受賞数日本一の福島県

(1) 受賞数

全国新酒鑑評会は、独立行政法人酒類総合研究所（東広島市）が1911年から行っている全国規模の清酒の鑑評会である。同研究所はその目的を「新酒を全国的に調査研究することにより、製造技術と酒質の現状及び動向を明らかにし、もって清酒の品質向上に資すること」としている。

2017酒造年度（2017年7月～2018年6月）*の金賞受賞数は全国で合計232点であり、そのうち福島県と兵庫県が各19点で全国第1位である。上

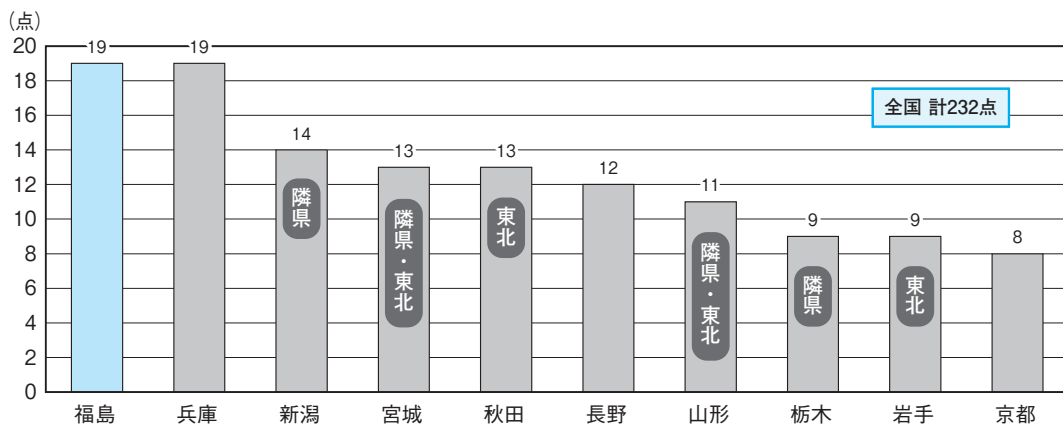
位には新潟や秋田といった全国的に有名な酒どころの県が並ぶなか、福島県は2012年度から6年連続での全国第1位に輝いている。2017年度には、宮城や秋田など東北各県や栃木などの隣県が上位に入っており、高い品質の酒づくりを行う県が近くに集まっていることで、酒どころとしての相乗効果が生まれているものと考えられる（図表1）。

2002年度以降の全国上位の推移をみると、福島県は第4位以内を続けてきており、2005年度と

2009年度にも第1位となっている。福島県のほかには新潟県や山形県が上位常連であり、新潟県は16年間で7回第1位となった（図表2）。このように福島県は最近では全国有数の金賞受賞県であるが、1989年度には金賞がゼロであった。品質向上に向けて県内の蔵元や県、関係機関が努力したことによって、日本一の県に至ったのである。

※ 図表1～2での年度は、酒造業界で使用されている独自の1年度の区切り方である「酒造年度」

図表1 全国新酒鑑評会金賞受賞数上位10府県（2017年度）



資料：酒類総合研究所「全国新酒鑑評会入賞酒について」

図表2 全国新酒鑑評会の金賞受賞数上位5府県

（単位：点）

| 2002年度 | | | 2003年度 | | | 2004年度 | | | 2005年度 | | | 2006年度 | | | 2007年度 | | |
|--------|-------------|-----|--------|----------|-----|--------|----------|-----|--------|-------|-----|--------|-------|-----|--------|-------|-----|
| 順位 | 県名 | 受賞数 | 順位 | 県名 | 受賞数 | 順位 | 県名 | 受賞数 | 順位 | 県名 | 受賞数 | 順位 | 県名 | 受賞数 | 順位 | 県名 | 受賞数 |
| 1 | 新潟 | 23 | 1 | 山形 | 24 | 1 | 新潟 | 26 | 1 | 福島 | 23 | 1 | 新潟 | 24 | 1 | 新潟 | 25 |
| 2 | 山形 | 20 | 2 | 新潟 | 22 | 2 | 山形 | 16 | 2 | 山形 | 18 | 2 | 福島 | 21 | 2 | 福島 | 17 |
| 3 | 広島 | 16 | 3 | 福島・秋田 | 13 | 3 | 宮城 | 14 | 3 | 新潟・秋田 | 17 | 3 | 山形 | 19 | 3 | 山形・秋田 | 16 |
| 4 | 福島・長野・京都・兵庫 | 13 | 5 | 宮城 | 12 | 4 | 福島・秋田・兵庫 | 11 | 5 | 長野 | 14 | 4 | 兵庫 | 15 | 5 | 兵庫・長野 | 12 |
| 2008年度 | | | 2009年度 | | | 2010年度 | | | 2011年度 | | | 2012年度 | | | 2013年度 | | |
| 順位 | 県名 | 受賞数 | 順位 | 県名 | 受賞数 | 順位 | 県名 | 受賞数 | 順位 | 県名 | 受賞数 | 順位 | 県名 | 受賞数 | 順位 | 県名 | 受賞数 |
| 1 | 新潟 | 22 | 1 | 福島 | 20 | 1 | 新潟 | 23 | 1 | 新潟 | 24 | 1 | 福島 | 26 | 1 | 福島・山形 | 17 |
| 2 | 福島・山形 | 18 | 2 | 新潟 | 18 | 2 | 福島・兵庫 | 19 | 2 | 福島 | 22 | 2 | 兵庫 | 17 | 3 | 宮城 | 16 |
| 4 | 秋田 | 15 | 3 | 山形・秋田・長野 | 17 | 4 | 山形 | 18 | 3 | 兵庫 | 20 | 3 | 新潟・秋田 | 15 | 4 | 新潟 | 15 |
| 5 | 長野 | 12 | | | | 5 | 宮城 | 17 | 4 | 山形・秋田 | 16 | | | | 5 | 山形 | 14 |
| 2014年度 | | | 2015年度 | | | 2016年度 | | | 2017年度 | | | | | | | | |
| 順位 | 県名 | 受賞数 | 順位 | 県名 | 受賞数 | 順位 | 県名 | 受賞数 | 順位 | 県名 | 受賞数 | | | | | | |
| 1 | 福島 | 24 | 1 | 福島 | 18 | 1 | 福島 | 22 | 1 | 福島・兵庫 | 19 | | | | | | |
| 2 | 山形・新潟 | 15 | 2 | 山形・兵庫 | 17 | 2 | 宮城 | 20 | 2 | 新潟 | 14 | | | | | | |
| 4 | 秋田 | 13 | 4 | 新潟 | 16 | 3 | 秋田 | 16 | 3 | 宮城・秋田 | 13 | | | | | | |
| 5 | 兵庫・長野 | 12 | 5 | 宮城 | 15 | 4 | 山形 | 15 | 4 | | | | | | | | |
| | | | | | | 5 | 新潟 | 14 | | | | | | | | | |

資料：酒造総合研究所「全国新酒鑑評会入賞酒目録」

(7月1日～翌年6月末)を使用している。本稿の他の箇所で使用する年度は通常の4月1日～翌年3月末を指していることに留意願いたい。

(2) 酒づくり日本一に向けた取り組み

① 県独自の酵母と酒造好適米

良質な酒づくりには、水や気候風土に加えて、良い酵母や酒造好適米が必要である。清酒製造場数と課税移出数量^{*}が大幅に減少し、下降局面をたどる福島県清酒の復権をかけて、1988年から県や福島県酒造協同組合(以下:県酒造組合)は県独自の酵母と酒造好適米の研究開発に取り組んできた。試行錯誤の末、1991年にオリジナルの「うつくしま夢酵母」を誕生させた。うつくしま夢酵母を使用した酒は、独特のフルーティーな香りを有し、華やかで酸味の少ないソフトでマイルドな味わいになる特長がある。また、2008年には吟醸酒用酵母として「うつくしま煌酵母^{きらめき}」が誕生した。「うつくしま夢酵母」はバナナ・メロンのような、そして「うつくしま煌酵母」はイチゴ・リンゴのような香りであるといわれる。福島県ハイテクプラザ会津若松技術支援センター(以下:県ハイテクプラザ)は2018年に「うつくしま煌酵母」の改良に成功し、これまでの弱点であった酸の発生を抑え、甘味と香りを際立たせることに成功した。

最高品種の酒造好適米として有名なのは「山田錦」である。山田錦発祥の地である播磨(兵庫県)の土壤で育った山田錦は特に品質が良く高品質な清酒づくりに適しており、山田錦の生産量の8割が播磨である。全国的に吟醸酒づくりは播磨産山田錦に頼っており、山田錦を求めての競争が激しい。そこで、本県は山田錦を超える酒米の開発に取り組んできた。福島県内では気候の問題から山田錦の栽培が難しく、山田錦に匹敵する米を生み出すために長い年月が費やされたが、2000年、県土の広い福島県の中山間地でも栽培しやすい待望の酒造好適米「夢の香^{かおり}」が初めて誕生した。福島県で長年にわたり酒造米として作付けされてきた「五百万石」に比べて、「夢の香」は、病気にかかりにくく、倒れにくく、寒さに強いうえで品質が良いといった特長があり、高い精米歩合にも

耐えることができるため、吟醸酒など高品質な酒づくりに適した、ふくしまブランドの酒造好適米となっている。

現在、新しい県オリジナル酒造好適米の次世代の主力品種にするべく、「福島酒50号」が2020年度の完成を目指して開発中である。

※ 課税移出とは課税物件を製造場(工場)から移出(出荷)することであり、移出されるときに酒税の納税義務が生じる。

② 清酒アカデミー

酒づくりにおける技術面での品質向上の取り組みは、県酒造組合と県ハイテクプラザが1992年に「清酒アカデミー」を設立したことから始まる。「清酒アカデミー」は、1984年設立の「新潟清酒学校」を参考に立ち上げたものであり、県ハイテクプラザ職員や県酒造組合の技術委員などが講師を務め、酒づくりに関する座学を中心に初級、中級、上級の3年課程において計312時間の講義と実習が行われる。「醸造数学」を始めとした基礎科目、原料などの製造実務のみならず、労務管理や酒税法といった法律知識など多くの項目を学ぶ場である。

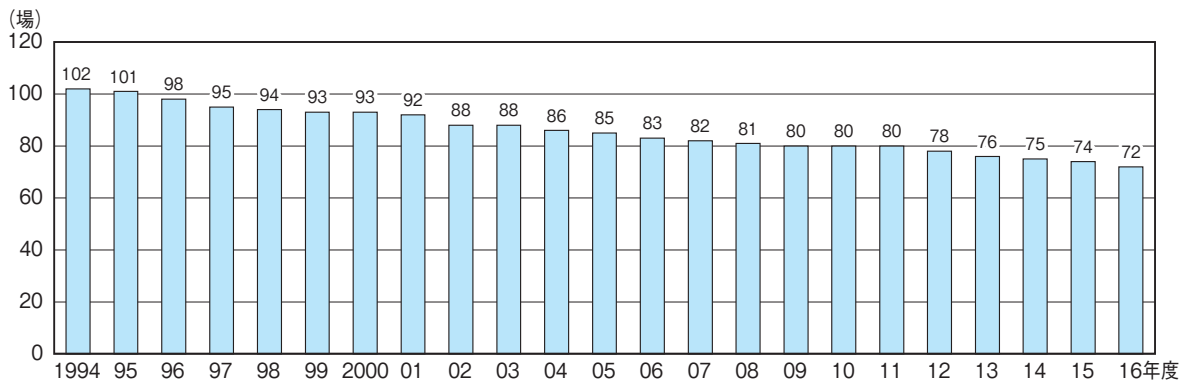
清酒アカデミーという酒づくりを学ぶ場があることによって、各蔵元の品質向上につながったことはもちろん、他業界に就職した蔵元の子息の勉強の場ともなり、後継者問題の解決にもつながっている。これまで約280名が卒業しており、多くの卒業生が酒づくりにたずさわっていることで、蔵元同士の横のつながりが形成されている。

また、県ハイテクプラザ醸造・食品科長で清酒アカデミー技術指導者の鈴木賢二氏が作成した「吟醸酒製造マニュアル」の存在も大きい。最も金賞を取りやすいと思われる製造法を列記したマニュアルであり、毎年、一部内容を更新して吟醸造りの最新情報を蔵元に提供している。

③ 金取り会

全国新酒鑑評会での金賞獲得を増やすことを目指し、1995年に「高品質清酒研究会」(通称「金取り会」)が県内蔵元によって結成された。通常、自分の蔵の醸造技術は門外不出として他の蔵に教えたがらないものであるが、金取り会では蔵元同

図表3 福島県内の清酒製造場数



資料：仙台国税局「統計情報 酒税」
※各年年度末（3月31日）が基準日

士が各自の酒を比べ、酒づくりの技術を教え合うなど、情報交換と技術共有をすることで、県全体のレベルアップを図っている。「金取り会」には約30蔵元が参加しており、金賞を受賞した銘柄の多くを同会所属の蔵元が占めている。

清酒アカデミーと金取り会によって、若い杜氏の育成が図られ、蔵元同士が情報交換することで全体的なレベルアップにつながった。今後の課題としては、各蔵元の独自色を出していくことである。金賞受賞6年連続日本一という実績が「ふくしまの酒」のイメージアップにつながったが、「何年連続受賞」ということだけでは消費者に対する具体的なインパクトに欠けると思われる。漠然とした福島県産酒というイメージをPRするだけでなく、「この蔵元のこの酒はこのような特色がある」といった蔵元や銘柄についての特色や独自性を消費者に浸透させていくため、努力を重ねていく必要があるのではないだろうか。

2. 福島県の清酒に関する諸計数の推移

(1) 清酒製造場（蔵元）数

福島県内における清酒製造場数*は減少基調で推移してきており、1995年度まで100場以上あったものが、現在（2016年度）は72場まで減少している。県酒造組合加盟の蔵元は60場台であるため、72場には休業中など実際に稼働していない蔵元も含まれているものとみられる（図表3）。

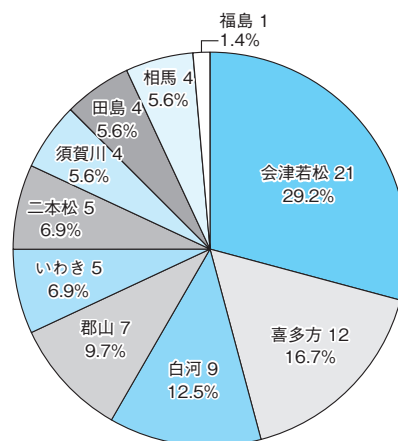
地域別（税務署管内別）の清酒製造場数をみると、会津若松が21場（構成比29.2%）と最も多く、以下、喜多方12場（同16.7%）、白河9場（同12.5%）などとなっており、会津若松、喜多方、田島合わせて約半数が会津に集中している（図表4）。

※ 清酒製造場は国税庁が使用する「清酒を製造している場所」という用語で、蔵元は福島県酒造組合などで一般的に使用されている「酒などの醸造元」のことであり、同じものを指している。

(2) 酒類小売業の販売場数

福島県内の酒類小売業の販売場数は2017年3月31日現在で3,393場である。1990年代後半から段階的な酒類小売業免許に関する規制緩和が行われ、2001年に距離基準の廃止、2003年に人口基準の廃

図表4 税務署管内別の清酒製造場数（2016年度末現在）



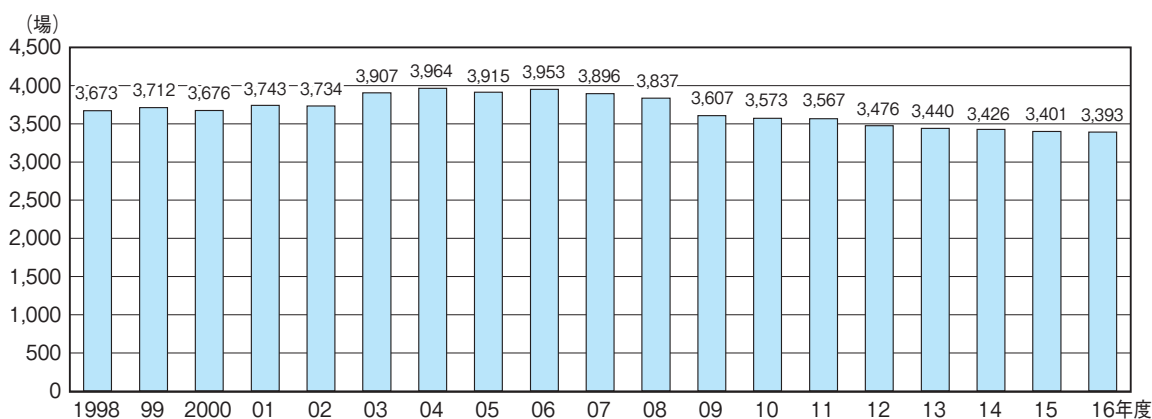
資料：仙台国税局「統計情報 酒税」

＜参考＞福島県内の各税務署の管轄地域 (単位：人)

| 税務署名 | 管轄地域 | 人口 |
|------|--------------------------------|---------|
| 福島 | 福島市 伊達市 伊達郡 | 383,696 |
| 会津若松 | 会津若松市 耶麻郡の一部(磐梯町・猪苗代町) 河沼郡 大沼郡 | 185,490 |
| 郡山 | 郡山市 田村市 田村郡 | 397,505 |
| いわき | いわき市 | 343,099 |
| 白河 | 白河市 西白河郡 東白川郡 | 140,154 |
| 須賀川 | 須賀川市 岩瀬郡 石川郡 | 132,657 |
| 喜多方 | 喜多方市 耶麻郡の一部(北塩原村・西会津町) | 55,892 |
| 相馬 | 相馬市 南相馬市 双葉郡 相馬郡 | 104,265 |
| 二本松 | 二本松市 本宮市 安達郡 | 95,707 |
| 田島 | 南会津郡 | 25,340 |

資料：仙台国税局 HP、福島県「福島県の推計人口」
 ※人口は2018年9月1日現在

図表5 福島県内の酒類小売業の販売場数推移

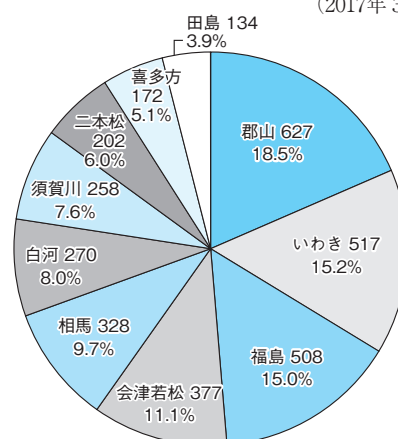


資料：仙台国税局「統計情報 酒税」
 ※各年年度末（3月31日）が基準日

止が行われた。時限法「酒類小売業者の経営の改善等に関する緊急措置法」により、緊急調整地域に指定された地域は保護されたが2005年8月に失効し、翌年に効力が切れたために事実上の自由化となった。そのため、1990年代後半から参入業者が増えて販売場数が増加したが、競争が激化したことによって淘汰が進み、2007年度以降は減少が続いている（図表5）。

地域別（税務署管内別）の酒類小売業販売場数をみると、会津（会津若松・喜多方・田島）合計の構成比が20.1%となり、同地域の人口構成比14.4%に比べ大きい。一方、福島・郡山・いわきといった大きな都市部では人口構成比に比べ小さいことから、蔵元のある地域には小規模の酒小売業が存在しているものと考えられる（図表6）。

図表6 税務署管内別の酒類小売業販売場数 (2017年3月末現在)



資料：仙台国税局「統計情報 酒税」

(3) 清酒課税移出数量

① 清酒課税移出量の推移

福島県内の清酒課税移出数量の推移をみると、

1998年には33,226kL（キロリットル）であったものが減少基調で推移し、2017年は13,226kLと1998年の約4割まで減っている。ただし、特定名称酒（吟醸酒・純米酒・本醸造酒）に限れば、2011年以降は増加基調を辿っており、2016年には一般酒（普通酒）との数量が逆転している（図表7）。全国については、1998年の1,133千kLから2017年に528千kLへと半減し、2012年以降は特定名称酒が増加基調と、福島県と同じ傾向にある（図表8）。

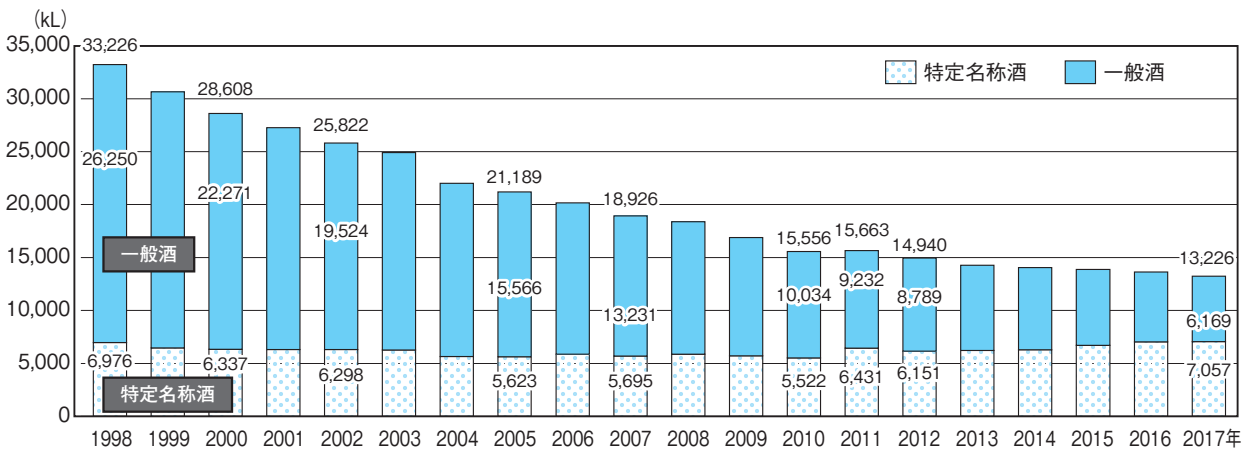
一般酒が大きく数量を減らす一方、特定名称酒が増加してきており、地酒ブームや高級志向などを反映して、蔵元が吟醸酒や純米酒などに力を注いでいるあらわれと考えられる。特に福島県につ

いては、震災以降の復興キャンペーンなどによって、金賞受賞数日本一の高い品質が徐々に他県の人にも認知されたことも要因となっているとみられる。

② 都道府県別の清酒課税移出量

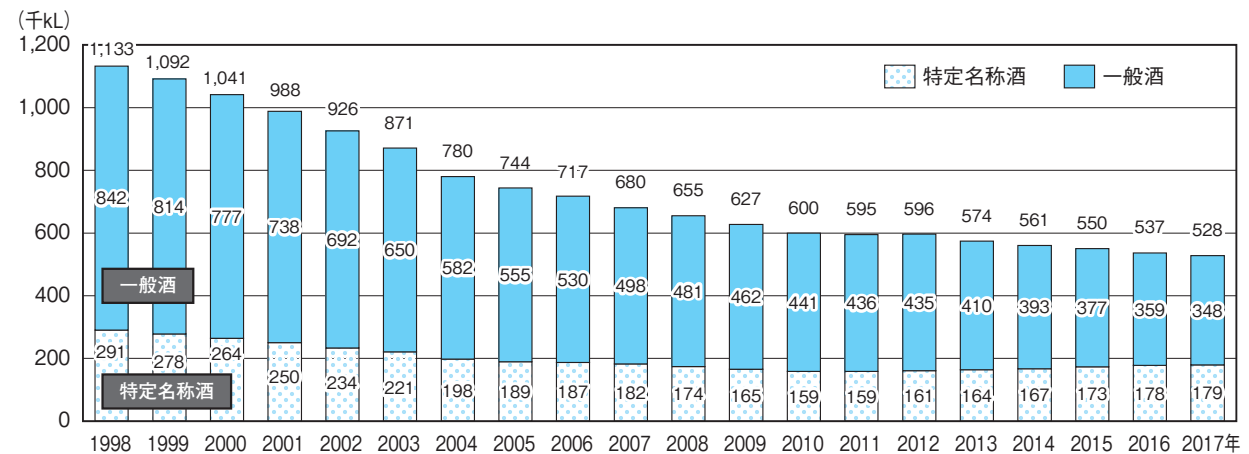
2017年の都道府県別の清酒課税移出量をみると、兵庫県が140,298kLで全国第1位であり、第2位の京都よりも4万kL以上多く、さらに、京都府と第3位の新潟県の間や、新潟県と第4位の埼玉県の間にも大きな差がある。福島県は全国第8位と、東北では秋田県に次ぐ第2位である（図表9）。兵庫県と京都府には全国規模の大メーカーが多数あるため、他の都道府県を大きく上回っている。

図表7 福島県の清酒課税移出量推移



資料：福島県酒造組合

図表8 全国の清酒課税移出量推移



資料：日刊経済通信社「酒類食品統計月報」

一方、特定名称酒に限定して都道府県別の課税移出数量をみると、新潟県が28,461kLで全国第1位であり、以下、兵庫県、京都府のあとに、秋田県、宮城県、山形県、福島県と東北4県が続いている。福島県は全国第7位であり、東北の順位としては、清酒全体では上回っている宮城県と山形県に逆転されているが、特定名称酒に力を入れた酒づくりが東北各県で行われていることで、福島県のみならず、「東北の酒」は高品質というイメージ形成につながっていくのではないだろうか（図表10）。

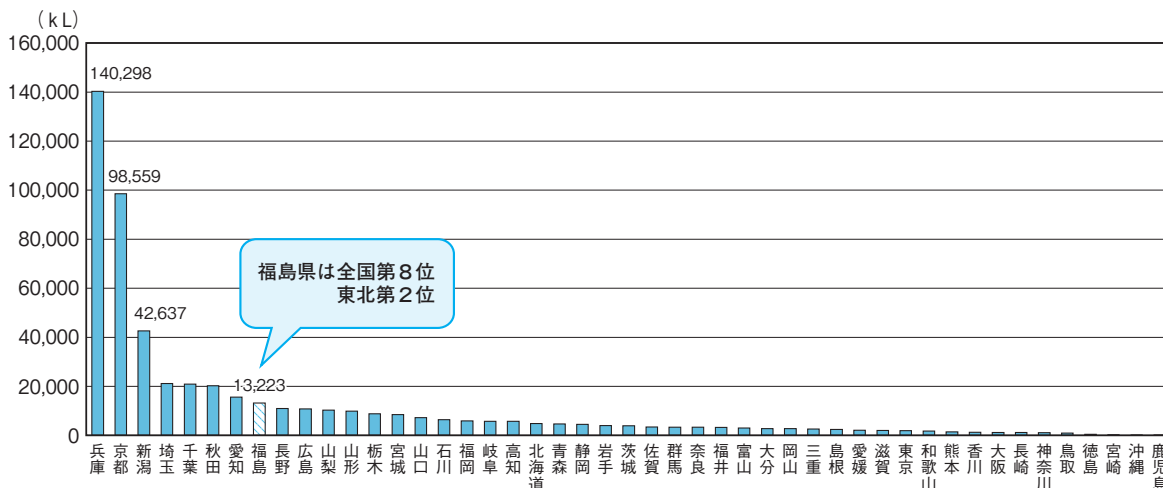
(4) 清酒販売数量

福島県内の酒類別販売量の推移をみると、酒類全体で緩やかな下降基調で推移し、震災のあった2010年度に大きく107,337kLまで減少した。震災以降は回復傾向をみせて2012年度以降は130,000kL前後で横ばい推移している。

清酒については、2010年度的大幅減少から2011年度以降回復基調をみせてきたが、2014年以降緩やかな減少基調にある（図表12）。ビールと発泡酒のビール系飲料などが販売数量を減らす中、第3のビールや酎ハイなどが含まれるリキュール[※]が増加してきた（図表11）。

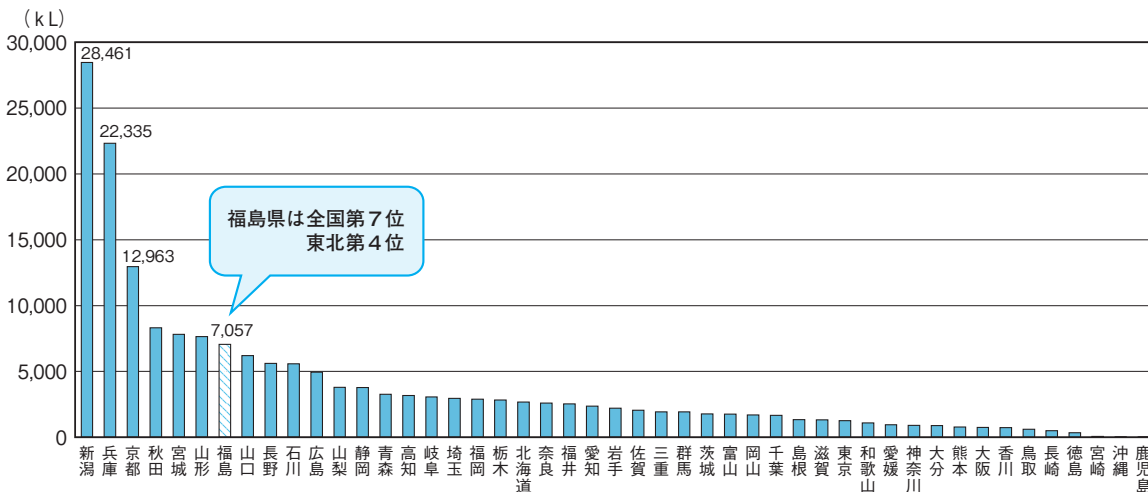
地域別（税務署管内別）の清酒販売数量は、郡

図表9 都道府県別清酒課税移出数量（2017年）



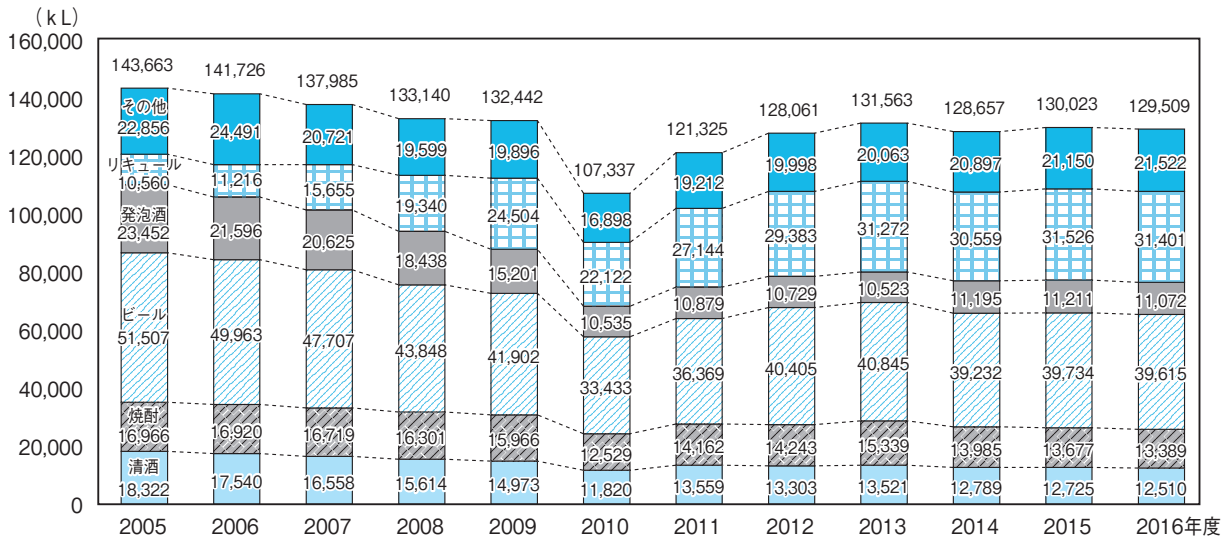
資料：日刊経済通信社「酒類食品統計月報」

図表10 都道府県別特定名称酒課税移出数量（2017年）



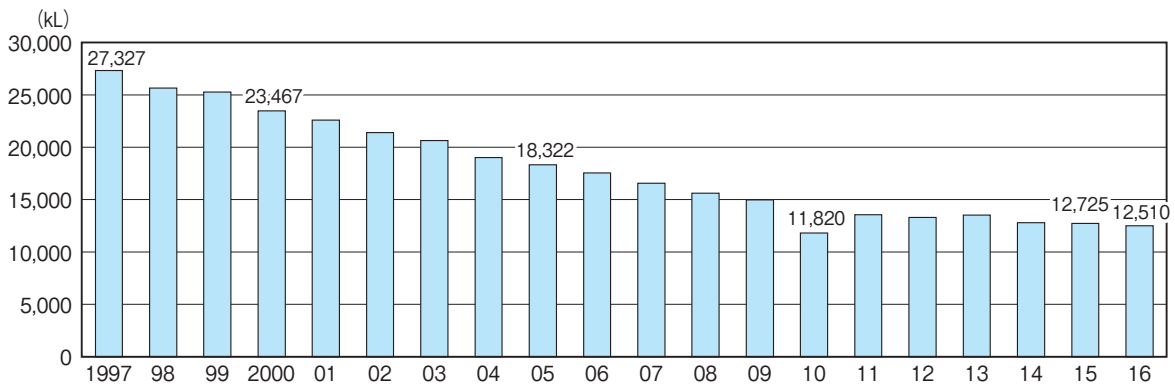
資料：日刊経済通信社「酒類食品統計月報」

図表11 福島県内の酒類別販売量



資料：仙台国税局「統計情報 酒税」

図表12 福島県内の清酒販売数量推移



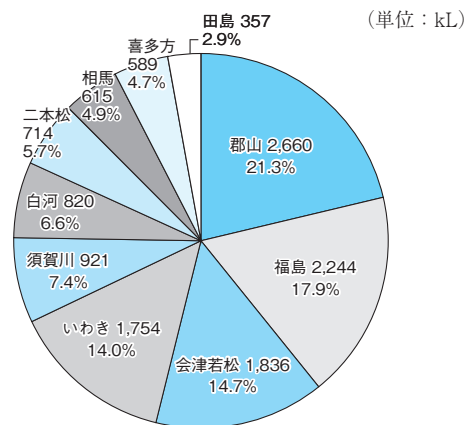
資料：仙台国税局「統計情報 酒税」
※期間は各年4月1日～翌3月31日まで

山2,660kL(構成比21.3%)、福島2,244kL(同17.9%)、会津若松1,836kL(同14.7%)、いわき1,754kL(同14.0%)などの順となっており、人口規模でいわきを下回る会津若松が上位に位置している(図表13)。人口1人あたり年間清酒購入量をみると、田島14.1L(リットル)、喜多方10.5L、会津若松9.9Lなどの順であり、会津地方での購入量が中通りや浜通りの各地方に比べ多い。なお、ここでいう販売数量、購入数量はその税務署管内の販売場で販売・購入された量のことであり、他地域からの買い物客や観光客が購入したものも含まれる。

※ リキユールは、酒税法では「酒類と糖類等を原料とした酒類でエキス分が2度以上のもの」と定義されており、第3のビール(その他の醸造酒に

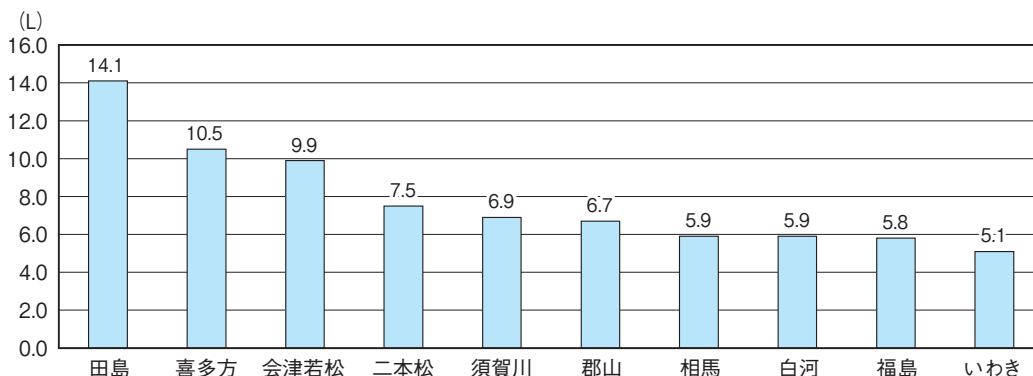
分類されるものもある)、酎ハイなどのソフトアルコール飲料などが代表的なものである。

図表13 税務署管内別の清酒販売数量(2016年度)



資料：仙台国税局「統計情報 酒税」

図表14 税務署管内別の人口1人あたり年間清酒購入量



資料：仙台国税局「統計情報 酒税」

福島県「福島県の推計人口」をもとに加工

※清酒購入量は2017年度、人口は2018年9月1日の数値を使用

3. 清酒の輸出状況

(1) 輸出数量

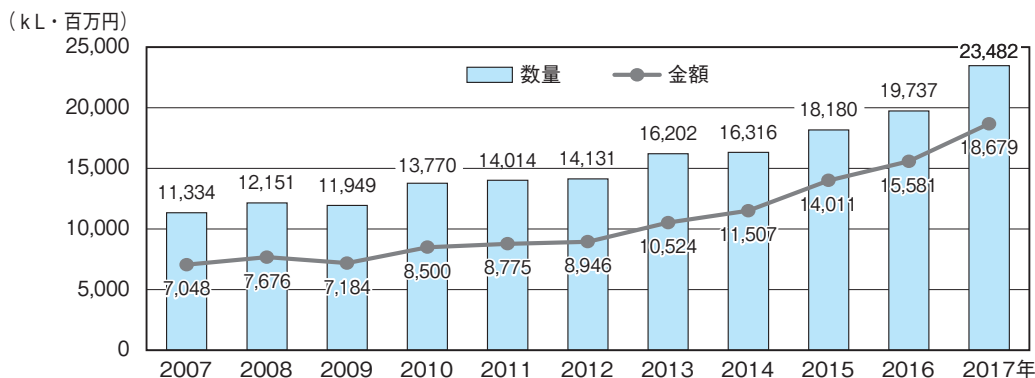
全国の清酒輸出数量をみると、2007年の11,334 kLから2017年は23,482kLと10年間で倍増している。同様に輸出金額は2007年の70億48百万円から2017年に186億79百万円へ約2.7倍の大幅増加となっている。数量・金額とも2013年以降の伸びが大きく、近年の日本食ブームなどから海外での清酒の需要が急増しているものと思われる（図表15）。

2016年度の都道府県別の清酒輸出数量は、兵庫県が7,630kLと最も多く、以下、京都、新潟、栃木などの順となっており、上位3位までは清酒課税移出数量上位3県（図表9）と同一である。第4位以下は各県蔵元の輸出に対する取り組みの違いや各国での日本産酒類の輸入規制措置（後述）

などもあって、課税移出数量の順位とは異なっている。福島県は課税移出数量で全国第8位と上位であるが、輸出数量に関しては全国第19位と中位にとどまっている（図表16）。

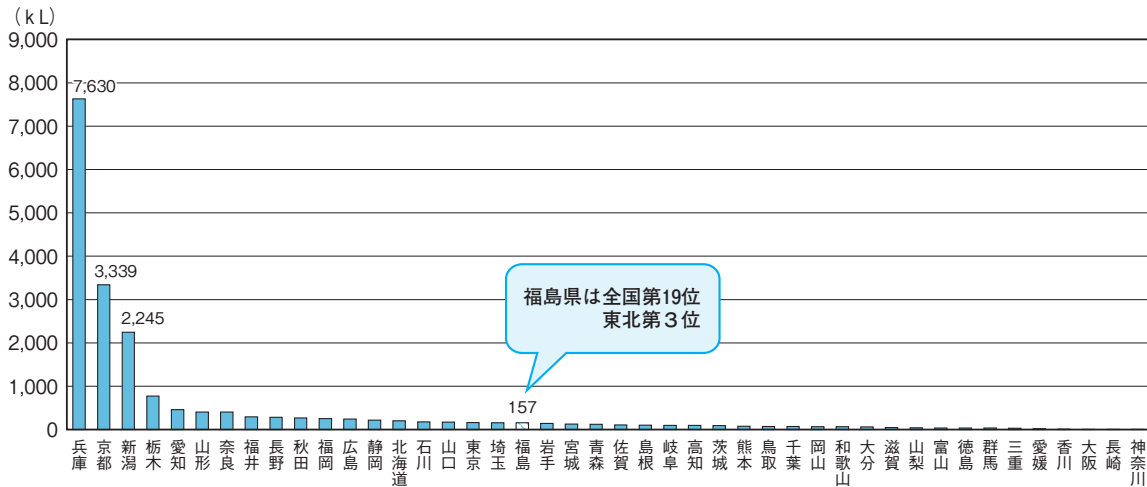
東京電力福島第一原子力発電所事故による輸入規制など原発事故に関連する影響もあるが、福島県産清酒は輸出の取り組みが山形県など上位他県に比べ弱かったのではないだろうか。山形県を代表する蔵元の出羽桜酒造は、全国的にみても早くから輸出に取り組んできた。出羽桜酒造は2008年と2016年の2度、世界最大規模のワイン品評会 IWC（インターナショナル・ワイン・チャレンジ）のSAKE 部門（日本酒部門）で最優秀賞にあたる「チャンピオン・サケ」を受賞している。そのような世界規模での受賞が同社の輸出促進につながり、山形県産清酒の輸出を牽引しているものと思

図表15 全国の清酒輸出数量



資料：国税庁「酒類の輸出統計」

図表16 都道府県別清酒輸出数量（2016年度）



資料：日刊経済通信社「酒類食品統計月報」

われる。

「チャンピオン・サケ」は福島県の蔵元も、ほまれ酒造（喜多方市）が2015年、奥の松酒造（二本松市）が2018年に受賞している。国内（全国新酒鑑評会）だけではなく、海外（IWC）でも福島県産清酒の品質の高さが評価されており、このことで海外への輸出拡大につながっていくことが期待される。

(2) 輸出先

全国の清酒輸出先（2017年）は、米国5,780kL（構成比24.6%）、韓国4,798kL（同20.4%）、中国3,341kL（同14.2%）などの順となっており、上位3カ国で6割近くを占めている（図表17）。

輸出先は北米と東アジアが中心となっており、近隣の韓国や中国は清酒輸出の大きな市場である。しかし、2018年8月22日現在で、韓国は福島県や宮城県など13都県産清酒に放射性物質の検査証明書を求め、中国は福島県や宮城県など10都県産清酒を輸入停止している（図表18）。宮城県や新潟県なども同じ輸入規制を受けており、アジアの大きな市場を開拓するために、早期に両国の規制が解除されることが待たれている。特に福島県については規制が解除された場合でも、宮城県などよりも両国消費者に受け入れられるためのハードルが高いと思われるため、蔵元、業界団体、行政が一体となって、美味しさとともに安全性や品質の

良さを訴えていく必要がある。2018年8月に米国ニューヨーク中心部のワインショップ2店舗に福島県産酒を専門に扱う「ふくしまの酒」の販売コーナーが開設された。福島県産清酒輸出の約半数は米国向けであり、同国での知名度向上と更なる販路拡大が期待される。

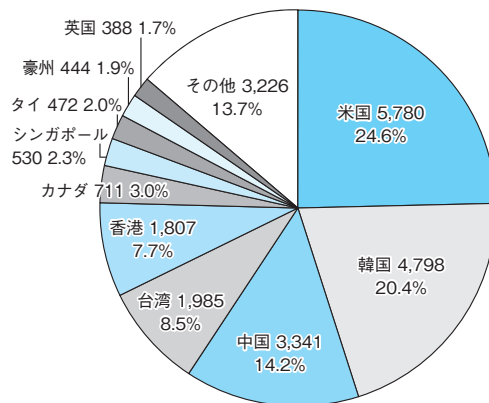
4. 福島県産清酒 PR に向けた取り組み

(1) 消費者への PR 活動

酒の専門家による「金賞受賞数日本一」という高評価を得ても、実際の消費に結びつかなければ、蔵元の維持発展にはつながっていかない。残念ながら、一般消費者にとって清酒といえば、新潟県

図表17 清酒輸出先上位10カ国（全国：2017年）

（単位：kL）



資料：日刊経済通信社「酒類食品統計月報」

図表18 日本産酒類の各国の輸入規制措置（2018年8月22日現在）

| 国・地域 | 規制措置の状況（必要な証明書等） | 備 考 |
|-------------|--|---|
| 韓 国 | <ul style="list-style-type: none"> 13都県産…放射性物質の検査証明書 13都県産以外…産地証明書 震災より前に製造したもの…製造日の証明書 | 指定都県：宮城、山形、 福島 、茨城、栃木、群馬、埼玉、新潟、長野、千葉、東京、神奈川、静岡 |
| 中 国 | <ul style="list-style-type: none"> 10都県産…輸入停止 10都県産以外…産地証明書 | 指定都県：宮城、 福島 、茨城、栃木、群馬、埼玉、新潟、長野、千葉、東京 |
| モロッコ | <ul style="list-style-type: none"> 13都県産…放射性物質の検査証明書 13都県産以外…産地証明書 震災より前に製造したもの…製造日の証明書 | 指定都県：宮城、山形、 福島 、茨城、栃木、群馬、埼玉、新潟、長野、千葉、東京、神奈川、山梨 |
| エジプト | <ul style="list-style-type: none"> 全都道府県…産地証明書 | |
| ブルネイ | <ul style="list-style-type: none"> 福島県産…品目証明書 福島県産以外…産地証明書 | |
| ドバイ アブダビ | <ul style="list-style-type: none"> 福島県産…放射性物質の検査結果報告書 | |
| ロ シ ア | <ul style="list-style-type: none"> 6 都県産…放射性物質の検査結果報告書 若しくは震災より前の製造日の証明書 | 指定都県： 福島 、茨城、栃木、群馬、千葉、東京 |

資料：国税庁「国税庁 東京電力福島第一原子力発電事故を受けた輸出証明書の発行について」

や兵庫県などのイメージが強く、蔵元や銘柄での知名度はあったとしても、県外での福島県産清酒の認知度は両県に比べ低いのが実態である。そこで、蔵元や酒造組合、県などは県内外での福島県産清酒の消費拡大に向けたPR活動を積極展開している。

今年（2018年）開催された主なイベントのうち、東邦銀行主催の「ふるさと応援！ふくしま酒まつり」は、福島県産の清酒や食材、福島県の観光などを首都圏の人に知ってもらおうと、県や酒造組合などの後援と三菱地所の協力によって、東京丸の内丸ビルで2014年から開催しているものである。500円で清酒3種が楽しめる飲み比べセットが仕事帰りのビジネスマンらに好評を得ている。

福島県観光物産交流協会が主催する「ふくしまの酒 飲み比べフェア」は首都圏向けに東京日本橋の県アンテナショップ「日本橋ふくしま館 ミデッテ」で2回開催され、1,000円で金賞受賞酒3種が飲み比べられるなど、多くの来場者が訪れた。同館は福島県の首都圏情報発信拠点であり、常設のイートインコーナーで県産酒の飲み比べセット（3種500円）を味わうことができ、同館の2018年9月上の第5位の人気商品となっている。また、同協会は県内においても、福島市のコラッセふくしま内の県観光物産館で「日本一のふくしまの酒 飲み比べフェア」を開催し、県内消

費者向けにも県産酒のPR活動を行っている。

福島県酒造協同組合は東京渋谷で毎年「ふくしま美酒体験in渋谷」を開催しており、試飲のみの第1部、立食形式の第2部に多くの来場者が集まり、40蔵元の約200銘柄を各蔵元のブースを巡りながら、その味わいの違いを楽しむことができる。

県が主催した「ふくしまの酒まつり」は「サラリーマンの聖地」として知られる東京新橋のJR新橋駅西口SL広場で54蔵元が参加し開催された。只見線応援ソング「只見線のうた」で本県との縁が深い俳優六角精児さんら芸人がステージで雰囲気盛り上げるなか、仕事帰りのサラリーマンらが大勢詰めかけた。

そのほか、2018年7月に県は福島県大阪事務所に県産酒を扱うアンテナショップを開設した。関西では初の福島県のショップであり、地理的に離れた関西での販路開拓につながることを期待されている。また、スイス・ダボスで開かれた世界経済フォーラムの年次総会（ダボス会議）に合わせたレセプション「ジャパン・ナイト」で、2016年と2018年の2度、県内蔵元の清酒や郷土料理が振る舞われ、ふくしまの酒が高品質で美味しいと好評を博した。

福島県産清酒のPRイベントについては、震災前は福島県内向けが中心であり、首都圏など県外向けのPR力が弱かったのではないだろうか。震災

後は復興支援の観点から福島県産品を首都圏で取り上げてもらえるようになり徐々にではあるが、首都圏など県外でのPR イベントが回数を重ねて定着してきている。福島県産清酒について、今後も県外に向けた活動を強化し、広く県外の消費者に継続してPR していくことが大切である。

(2) 観光との連携

福島の清酒は、福島県の観光を県内外に向けてPR する有効なツールでもあり、その一環として現在、「ふくしま酒蔵めぐり スタンプラリー2018」を実施中である。このイベントは酒蔵等（地ビール工場やワイナリーなども含む）、道の駅、飲食店、温泉施設への訪問や買物でスタンプポイントを集めると、ポイント数に応じて宿泊券や電化製品が抽選で当たるほか、条件をクリアすればもれなく商品ももらえるなどの内容となっている。このスタンプラリーは、福島県でアフターデス

ティネーションキャンペーンが開催された2016年から始まったイベントである。観光客が実際に蔵元を見学することは、福島県清酒に対する愛着を深めてもらう絶好の機会であり、さらに蔵元見学が観光資源となって県内観光業の活性化につながっていくことも期待される。

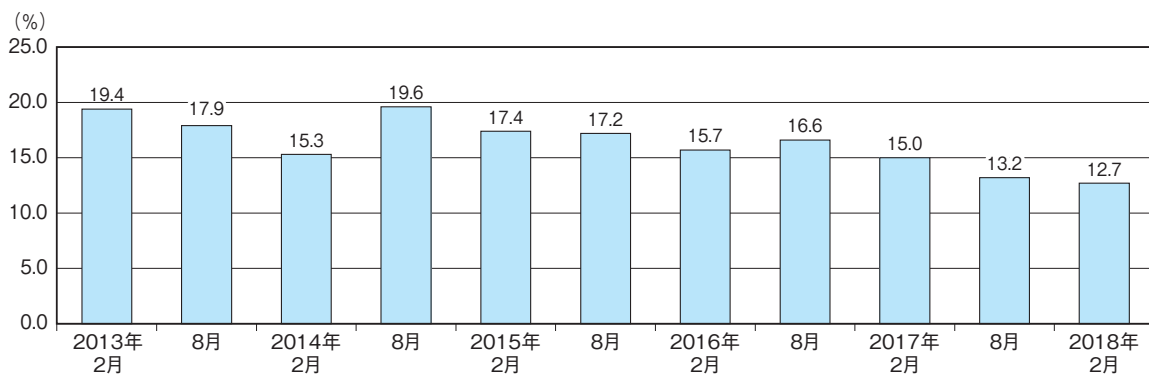
新潟県で毎年3月に開催されている「にいがた酒の陣」（新潟県酒造組合主催）は、同県産清酒を試飲できる大きなイベントであり、2018年3月開催時には85蔵元（約500銘柄）が参加し、過去最高の141,523人が来場した。同イベントは、新潟の酒を多くの人にPR するとともに観光客を呼び込むことができる大きな観光コンテンツとなっている。新潟県の酒のブランド力は非常に強く、本県が一朝一夕に真似できるものではないが、「金賞受賞数日本一」という点をアピールして少しでも観光に結び付いていくことが望まれる。

図表19 主な福島県産清酒のPR イベント（2018年）

| イベント名 | 開催日 | 主催者 | 開催場所 | 内 容 |
|----------------------|-----------------|-----------------|----------------------------|--|
| ふるさと応援！ ふくしま酒まつり | 4月19日 ～20日 | 東邦銀行 | 東京丸ビル | 県産地酒3種とおつまみを500円で提供。丸ビルを保有する三菱地所が協力。2014年から毎年開催。 |
| ふくしまの酒 飲み比べフェア | 6月11日 ～15日など | 福島県観光物 産交流協会 | 日本橋ふくし ま館ミデッテ | 金賞受賞酒の飲み比べ3種で1,000円。第二弾は6/18～6/24に同場所で開催。 |
| ふくしま美酒体験 in渋谷2018 | 8月25日 | 福島県酒造協 同組合 | セルリアンタ ワー東急ホテ ル（渋谷区） | 40蔵元が参加し、1部が試飲会（参加費2,000円、定員700名）、2部が立食ブッフェディナー（同6,000円、同500名） |
| ふくしまの酒 まつり | 9月6日 ～7日 | 福島県 | JR新橋駅西口 SL広場 | 54蔵元が参加し、170銘柄が出品。俳優や歌手のステージもあり多くの来場者で賑わった。 |

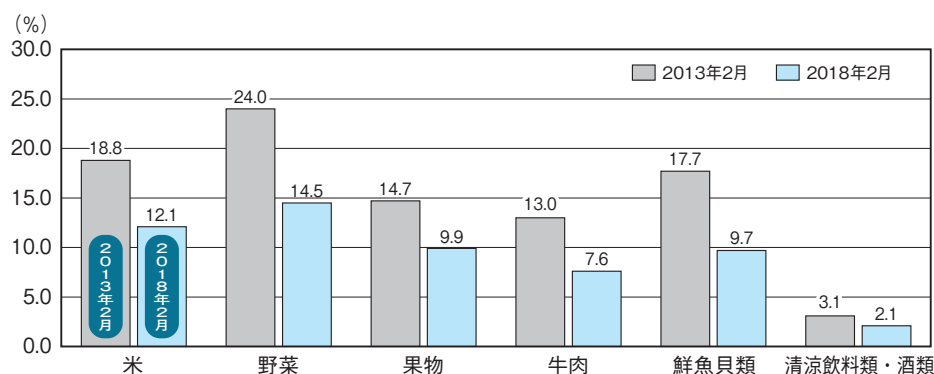
資料：各団体HP や新聞記事をもとに作成

図表20 購入をためらう産地に福島県をあげた回答割合



資料：消費者庁「風評被害に関する消費者意識の実態調査」

図表21 産地に注意する食品の回答割合



資料：消費者庁「風評被害に関する消費者意識の実態調査」

(3) 風評払拭に向けての大きな役割

県では、東京電力福島第一原発事故による風評被害払拭に、農林水産物や各種製品の生産者や各自治体、地域住民などと一体となって取り組んでいる。消費者庁が首都圏や東北、大阪、愛知などの消費者を対象に実施している「風評被害に関する消費者意識の実態調査」によると、購入をためらう産地として12.7%の人が「福島県」と回答している（図表20）。調査が回数を重ねるにつれ減少しているものの、依然として1割を超える人が福島県産品の購入をためらっているのが実態である。その産地について注意する食品としては、すべての県産米の放射性物質濃度を調べる「全量全袋検査」で安全性が確認された米や、モニタリング検査を行い安全・安心な野菜や果物なども、回答割合が減少傾向ながらも依然として1割前後ある（図表21）。「清涼飲料類・酒類」についても、回答割合は以前から低いながらも購入をためらう人が存在している。

風評被害を克服するためには、多くの人の目に触れる場所で安全性や品質の良さなどを地道に訴えていくことが重要である。福島県清酒のPRイベントが首都圏各地で開催され、その場では県産酒だけではなく本県産食材も提供して、品質の良さや美味しさをPRしている。イベントに立ち寄った人が、そのことで本県産清酒・食材のファンとなり継続的に購入してもらえよう、今後もイベントを継続して1人でも多くの「ふくしまファン」を得ていくことが大切である。

5. さいごに

福島県産清酒が6年連続で金賞受賞数日本一となったのは、蔵元や酒造組合、県などが一体となって、県産酒の品質向上に取り組んできた努力の賜物である。この成果が消費や観光に結び付くよう、蔵元や関係機関などが各種イベントを開催し、多くの人にアピールしている。人口減少や若者の酒離れなど、酒を取り巻く環境は今後ますます厳しくなっていくことが予想されている。だからこそ、量だけではなく質を求めていくことも必要であり、福島県産清酒の品質の高さ、金賞受賞数日本一という実績をより声高にPRしていくことが必要なのではないだろうか。

幸いに海外での日本食ブームがあり、日本食にマッチする清酒は今後さらに海外での需要が増していくものと考えられる。福島県産酒の輸出増加のためには、現在、輸入規制が行われている国の規制解除が行われるよう、働きかけていかなければならない。

また、残念ながら国内においてもいまだに「福島産」というだけで拒絶反応を示す人がいるのも事実である。今後は、そのような人を減らす牽引役として「ふくしまの酒」が大きな役割を果たしていくことが期待される。

（担当：高橋宏幸）